

非常事態宣言が出され、極力外出を控えようという状況が続くなか、動画などで様々な情報が配信されています。有名人の家庭料理やケーキづくりなど自宅での過ごし方の紹介や、私たちに語りかける応援メッセージを見ることで力づけられます。

現在会員登録数 3,328 人さま。次号は 5 月 20 日発行の予定です。／

＋----- ◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■-----■
【1】お知らせ

●当財団公式 YouTube チャンネルができました！

このたび、財団公式 YouTube チャンネルを作成しました。

<https://www.youtube.com/channel/UCgPj7D2ReQ0J03zhMMLfuIA>

初めての投稿は、子ども向けに本を紹介する「YouTube 版 本の海大冒険〈1〉『こうさぎと4ほんのマフラー』（のら書店）」です。

今後、総括専門員・土居安子を中心に、子どもの本を紹介する動画をアップしていきます。ぜひ、ご覧ください。

チャンネル登録もお願いいたします。

●昨年度開催した講演会の報告集を販売しています

『2019 年度国際交流事業報告集

国際講演会：韓国の絵本作家パク ジョンチェの絵本を語る

子ども向けワークショップ：パク ジョンチェさんと絵本をつくろう！』

発行：当財団 2020 年 3 月 A4 判 42 頁 1000 円＋税

『2019 年度講演会報告集

紙芝居の歴史から子どもの読書文化について考える 講師：浅岡靖央』

発行：当財団 2020 年 3 月 A4 判 34 頁 800 円＋税

詳細は ↓

http://www.iiclo.or.jp/06_res-pub/05_publication/index.html#hanbai

●講座「目で見えるイギリス児童文学の歴史」 参加者募集

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2 月と 3 月に開催を中止した、3 回連続講座「目で見えるイギリス児童文学の歴史」の第 2 回、第 3 回を合わせた内容の講座を開催します。

日 時：令和2年7月5日（日） 午後1時～4時
会 場：大阪府立中央図書館 多目的室 （東大阪市荒本北）
講 師：三宅興子さん（当財団特別顧問）
内 容：

- 講義（1） 「子どもの本の『第一黄金時代』」
- 講義（2） 「20世紀イギリスの子どもの本」
- 資料の展示・閲覧

定 員：60名（申込先着順） 参加費：2,500円

*参加費には連続講座の内容をまとめた冊子を含みます（当日テキスト）。

主 催：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団

お申し込み、詳細は ↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html

※本講座は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、今後延期または中止となる可能性があります。

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いします。

お申し込み、詳細は → <http://www.iiclo.or.jp/donation.html>

● 当財団公式 Twitter → https://twitter.com/IICLO_News

■ ----- ■
【2】コラム

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

『ぼくたちがギュンターを殺そうとした日』 ヘルマン・シュルツ/作 渡辺広佐/訳 徳間書店 2020年3月 対象年齢：小学校高学年以上

あらすじ：1947年、ドイツ。フレディは、両親とうまくいかず、おじさん夫婦の農家から学校に通っていた。フレディと5人の仲間たちは、同級生で難民のギュンターがわずらわしくて、彼の両ポケットにおしっこをして、トロッコに閉じ込めて泥炭を投げつけるというひどいじめをした。村の人や親にそのことがばれるのが怖いため、年上のレオンハルトがギュンターを殺そうと言い出した。フレディは、どうすればいいのか不安にさいなまれる。

T：敗戦後のドイツの村の様子が、日本でいうと小学校高学年から中学生ぐらいの男子のいじめを通して伝わってくるとも印象深い作品です。

Y：村には難民で貧困の家族、父親が戦死した家族、戦争から戻ってきて息子を殴る父親、捕虜になって戻ってきたり、戦争中SS（ナチス親衛隊）だったりした若者たちが住んでいます。子どもたちに語ることでできない過去を背負い、隠された負の感情が渦巻いている村だからこそ、起こった事件だと考えることができます。

T：それは、「ギュンターを殺すことになるんなら、戦争中のようなつもりでやるしかないよ。」(p.78) というフレディの友だちの発言からも読み取る

ことができます。

しかし、いじめ、殺人、戦争という重いテーマを描いているのに、読後にもしろい物語だったと思うのはなぜだろう。

Y：なるほど。フレディが牛飼いをする様子や、ロッセという馬の世話をする様子など、村での日常生活が目につかぶように描かれていたことが関係するのかもしれないね。私は、細かい日常が描かれることで、いじめも殺人もいつでも誰にでも起こり得ることだということが書かれているように思いました。

T：フレディがじゃがいもの選別を手伝いながら、いじめの首謀者であるレオンハルトの母親と会話をする場面（P.136）も印象的でした。

Y：また、詳しいことは言いませんが、子どもを信頼していることが感じられる児童文学らしい結末のありようにもあるかもしれません。

私がおもしろかったのは、ギュンターを殺す現場に6人が揃うまでにも、結末にいたるまでにも、いくつもの選択肢があり、その選択によって、1回目のいじめすら起きなかったかもしれないということが読み取れたことです。フレディが秘密を抱えながら追い詰められていく様子がリアルで、感情移入しながら読みました。そして、自分が子どものころに抱えていた秘密に押しつぶされそうになった感覚を思い出しました。

T：フレディの隣の家に住む孤児の少女ルイーゼの活躍はユーモラスで、カッコいい。窮地を救ってくれるフレディのいとこ、若い帰還兵のヴィリーもずいぶん魅力的です。

Y：ともすれば、負の感情の連鎖が続きそうになる今だからこそ、善と悪、正しいことと間違ったこととは何なのか、人間は過ちから逃れることができるのかという命題について考えることのできるこの本は貴重だと思いました。

* 今回のゲストは当財団の宮川健郎理事長（T）です。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第56回「鳥をとるやなぎ」

同居する怪異と科学

ある日、尋常四年生の私は、友人の藤原慶次郎から鳥を吸い込むくエレキの楊の木の話聞き、興味を覚えます。慶次郎が茶屋でく馬をひいた人から聞いたというその楊を探しに、慶次郎と私は煙山の野原から川を上流の方へ遊んでいきます。

川添いに並び立つ、大きな楊の木を見ながら進みますが、鳥を吸い込む楊を発見することができません。しかし、川向こうへ渡るために水へ足を踏み入れた途端、百足ばかりの百舌がく磁石に吸い込まれたようにく大きな楊の中に落ち込むのを目にします。

石を投げつけたところ百舌は飛び立ち、ゆえに鳥が死んでいない（不思議な楊ではない）ことがわかると、二人はがっかりしたり寂しい気がしたりします。それでもくどこかに、けれど、ほんとうの木はあると信じますが、その一方でく鳥を吸い込む楊の木があるとも思えず、又鳥の落ち込みようがあまりひどいので、そんなことが全くないとも思えず、ほんとうに気持ちが悪

くな)り、揺れ動く心情を吐露します。結末はくけれどもいまでもまだ私には、楊の木に鳥を吸い込む力があると思えて仕方ない)と述べて締めくくられます。

この不可思議な楊は、くエレキ)やく磁石)のイメージで語られるもの、すなわち近代科学を思い描くものとして登場します。その楊を見つけ、何度か目撃するうち、二人もやがてはくその木の中でもずが死ぬとは思)わなくなります。つまり、彼らは科学的な解釈のもと、怪異によって鳥が吸い込まれたのではないことを確認しているのです。

しかし、どういうわけか結末にかけて、少なくともく私)の内面においては、その魔性を秘めた力がくあると思えて仕方ない)という表現で反転・肯定されていきます。怪異的な世界に収斂されていくこうした構図は、言うまでもなく本メルマガ前号(N0.115)にて取り上げられた「さいかち淵」にも、そして晩年の「風[の]又三郎」にも共通するものです。(参考：秋枝美保「鳥をとるやなぎ」論」1980年)

近代科学の教育を受けながら、他方で前近代的な土俗信仰が色濃く残る東北で生を受けた賢治には、その両方が同居していたのかもしれない。く私)や慶次郎が科学的な解答をいったん導きながら、なおどうしてもくあると思えて仕方ない)と感じるのは、他ならぬ賢治その人の揺るぎない考えだったと言えるのではないのでしょうか。(ペ吉)

(本文の引用は、新潮文庫版『新編 風の又三郎』によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のこぼ 10

ペンシルバニア トランシルバニア ミンスク！
ぼくは ちめいで しを つくって
まほうの じゅもんみたいに となえた。
すると、せまい へやに いても、こころは とおくへ とんでいけるのだ
った。

(『おとうさんのちず』ユリ・シュルヴィッツ／作 さくまゆみこ／訳 あす
なる書房 2009年5月 p.19)

戦争で焼け出された「ぼく」の家族は、住んでいるところを逃げ出し、「とお
い とおい ひがしの くに」にやってきます。ある日、お父さんは、パンを
買いに市場に行き、パンの代わりに地図を買ってきました。

ぼくはお父さんのことを「ゆるせない！」と怒りますが、お父さんが壁に地図
をはると、その地図に夢中になります。そして、ながめたり、書き写したり、
引用にあるように地名で詩を作って遊び、砂ぼくや、海や雪山や宮殿や都会
を旅します。地図は、ぼくに、ひもじさと貧しさを忘れさせ、「はるか とお
くで まほうの じかん」を過ごすことを可能にしました。

これは、1935年にポーランドで生まれたユリ・シュルヴィッツの自伝的作品
です。戦火を逃れて中央アジアのトリキスタン(あとがきには「今のカザフス

タン」とあり)で暮らしていた経験が元になっているそうです。

シュルヴィッツの絵は、地図を通して彼がどんなに豊かな時間を過ごしたか、世界の大きさを感じたかが描かれ、時間を忘れて見入ってしまいます。

私はこの本を読むたびに、パンの代わりに地図を買ったお父さんの決断に思いをはせ、「文化とは何か」「生きるとは何か」という問いを心の中で反芻します。(Y)

《4》 行って来ました！

※新型コロナウイルス感染の拡大に伴い、外出自粛が強く求められる状況です。今月は休載とします。ご了承ください。

■ ----- ■

【3】全国のイベント紹介

■ ----- ■

講座・講演会、展示会、公募等のイベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベントの開催内容が変更される可能性があります。最新情報は主催者へお問い合わせください／

■ ----- ■

【4】プレゼント

■ ----- ■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『ぼくたちがギンターを殺そうとした日』を1名の方にプレゼントします。ご希望の方は、メールで件名「メルマガ NO.116 プレゼント希望」とし、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ office@iiclo.or.jp にお送りください。

締切は5月11日(月)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

— | — | — | — | — | — | — | — | — |

暖かくなって木々の緑が日に日に鮮やかさを増してきました。窓を開け放って春の新鮮な空気を入れて大きく深呼吸してみると、とてもよい気分転換になります。生活必需品の買い物以外は出かけることがほとんどなくなりましたが、このような時期だからこそ、当財団として何かできないかと考え、YouTubeチャンネルを開設したところです。ご愛顧のほど、どうぞよろしく願います。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまで願います。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメルマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/m1_magazine/index.html パソコンからどうぞ

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp
